

2019年1月16日(水)

トヨタ財団研究会：日本の中国研究の軌跡と現在

「中国外交史」

川島 真

- (1) その研究領域がいかにかに形成されたか
- (2) 戦前以来、その分野が何を問題にし、それをいかにして解決しようとしたか(方法論)
- (3) そこでの議論はどのように展開したか(およその研究動向)、
なにが研究上の争点になってきたか
- (4) これらの研究蓄積の現代的意義
- (5) 研究の現段階と今後の展望はどのようなものか

■ 中国+外交史研究の形成

1) 同時代史的研究：宣教師、海関職員

H.B.Morse ら

2) 中国外交史というジャンルの形成

劉彦などの評論 → 蔣廷黻、あるいは郭廷以、そして王信忠。

→ 『籌辦夷務始末』『清季外交史料』の刊行

→ 異彩を放つ、王芸生『六十年来中国与日本』。

西南連合大学など、重慶での諸学問(陳体強ら)。

3) 戦前期日本の外交史研究

・植田捷雄『支那外交史論—特に米国の門戸開放政策と列強の勢力範囲設定策を中心として』(巖松堂書店、1933年) → 租界、租借地の研究へ

・田村幸策『大東亜外交史研究』(大日本出版、1942年) ← 『支那外債史論』

・矢野仁一『満洲における我が特殊権益』(弘文堂書房、1928年)、同『日清役後支那外交史』(東方文化学院京都研究所、1937年) → 1939年にアヘン戦争、アロー戦争研究。

3) 戦前・戦後直後の実証研究：Pollard、植田、坂野

→ Fairbank の意味

4) 戦後初期の日本での「冊封体制論」の問題提起

→ 西嶋、佐伯ら。マークマンコール、佐々木。

5) 独自に展開する「南港学派」：外交文書のシリーズ、専刊

■ マルクス史学全盛期の中国外交史

6) 中国大陸での外交史の停滞と人民闘争史観、ただし張振鵬。

7) 非難される外交史：マルクス主義的歴史学と外交史。回顧と展望での坂野批判

→ 「民衆」、李恩涵

坂野正高も馬建忠研究、「内在性」研究。これも時代に引きずられたか。

■ 外交文書を利用した中国外交史研究へ

8) 外交文書の本格的使用による研究は 1990 年代から展開。

→ 革命史観への問い、民国史、清末再評価もひとつの要因。

9) 諸問題

- ・ 清末と民初の断絶、そして民国外交と現代中国外交などとの断絶
- ・ 文書公開の推進と研究領域の拡大、方法論的検討が不十分
- ・ 国際政治史、日本外交史などとのレベルの差
- ・ 何よりも、「外交史」というジャンルへの根源的批判。
国際関係史。国際政治史。グローバルヒストリー。
歴史学と社会科学系歴史学の関係性。
- ・ 21 世紀から、多くの個人文書の公開。

■ 現代外交研究との関係性

1) チャイナワッチャーからの出発

- 石川、中嶋、あるいは岡部、宇野、石井
- 人民日報を丹念に読むという手法
- イデオロギー、リアリズムなどの中国外交理解

2) 「政治学」と「中国学」の狭間

- 日本では国分、毛里、そして青山へ
- 中国では現実的な政治と関連付けられた政治分析と外交史の進展
(党史との接点。牛軍、沈志華ら)
- * 中国での「国学」。あるいは冊封論の現代外交からの諸研究。
世界的な中国への関心の中で中国外交の歴史への関心など。

3) 方法論の変容

- 外交文書と個人の記録、そのほかを組み合わせる手法
中国外交文書の公開とその停止。
- 相手国の文書を使うという手法、マルチアーカイブ、冷戦史研究の進展

4) 現代外交研究と外交史研究との邂逅

→ 『中国外交史』テキスト（東大出版会）、あるいは岡本隆司の「土庶」論。

■ 研究の現代的意義

1) 中国における外交史研究の展開

2) 冊封朝貢論と現代外交

3) 中国自身のこれから秩序論

《文献リスト》

青山治世『近代中国の在外領事とアジア』（名古屋大学出版会、2014 年）

- 植田捷雄『支那外交史論』巖南堂書店、1939年
 ——『東洋外交史』(上) 東京大学出版会、1974年
- 岡本隆司『近代中国と海関』名古屋大学出版会、1999年
 ——『属国と自主のあいだ—近代清韓関係と東アジアの命運』名古屋大学出版会、2004年
- 川島真『中国近代外交の形成』名古屋大学出版会、2004年
 ——「中国近代外交史の可能性と課題」(青山瑠妙・川島真『中国外交(史)研究への視座』
 〈公共政策を読む 第二集〉北海道大学公共政策大学院、2006年、35-52頁)
- 가와시마 신 (川島真)「중국 근대외교사 연구의 방법과 과제 (中国近代外交史研究の方法と課題)」(『梨花史学研究』第49輯、2014年12月、257-272頁)
 ——「東アジア国際政治史—中国をめぐる国際政治史と中国外交史」(日本国際政治学会編、
 李鍾元・田中孝彦・細谷雄一責任編集『日本の国際政治学』有斐閣、2009年、75-
 95頁、【中国語訳】「東亞国際政治史—圍繞中国的国際政治史与中国外交史」日本
 国際政治学会編、劉星訳『日本国際政治学第四巻 歴史中的国際政治』(北京大学
 出版社、2017年、66-85頁)
- 戴海斌采访整理「我是如何进入中国近代外交史研究的—川岛真教授访谈录」(江文君主編『現代中国与世界』第一輯、上海書店出版社、2018年4月所収、訪問時間：2014年10月2日 下午 2:00—4:00)、インターネット版
https://www.sohu.com/a/239807276_501364 【2018年12月22日アクセス】(ただし、校正が不十分で誤字脱字などが多い点が難点)
- 田村幸策『最近支那外交史』外交時報社、1938年
- 箱田恵子『外交官の誕生—近代中国の対外態勢の変容と在外公館—』名古屋大学出版会、2012年
- 濱下武志「朝貢貿易システムと東アジア」(『国際政治』82、1986年)
 ——『中国近代経済史研究—清末海関財政と開港場市場圏』汲古書院、1989年
 ——『近代中国の国際的契機—朝貢貿易システムと近代アジア』東京大学出版会、1990年
 ——「宗主権の歴史サイクル—東アジア地域を中心として」『歴史学研究』〈増刊号〉690、
 1996年
- 坂野正高「第一次大戦から五卅まで—国権回収運動覚書」(植田捷雄編『現代中国を繞る世界の外交』野村書店、1951年所収)
 ——「総理衙門の設立過程」(『近代中国研究』1、1958年)
 ——「中央研究院近代史研究所の外交档案」(『東洋学報』43-4、1961年)(『近代中国外交史研究』に補正加筆の上、再収録)
 ——『近代中国外交史研究』岩波書店、1970年
 ——『近代中国政治外交史—ヴァスコ・ダ・ガマから五四運動まで』東京大学出版会、1973年
 ——「政治外交史—清末の根本資料を中心として」(坂野正高 [他] 編『近代中国研究入門』東京大学出版会、1974年所収)

——『中国近代化と馬建忠』東京大学出版会、1985年

茂木敏夫『変容する近代東アジアの国際秩序』〈世界史リブレット 41〉山川出版社、1997年

園田：研究者グループの連合と分断。

日本外交史、中国外交史の連携。

文書の性格が違う。

坂野先生の後継者、イデオロギー的動向。

1) 研究者の集合と離反をつくるメカニズム、どのようなものが作られるか。

→文書、問い、イデオロギー???

2) 歴史研究と外交史研究の親和性

→プラクティカルな要請。戦後もあったはずではないか。実践的な知。

実践的な知との関わり。

横尾：現代外交研究と歴史研究、参照してできるか。

小嶋：史料的な観点。方法論的理解。

アメリカ地域研究の影響。

鶴園：中国外交史研究、他分野、多地域との対話の必要性。華僑、華人研究、台湾研究。